

神のくまこと(ピステイス)から人間のくまこと(ピステイス)へ
～小川修先生を覚えて

大柴 譲 治

奨励者紹介[おおしば・じょうじ]

日本福音ルーテル大阪教会牧師

社会福祉法人るうてるホーム理事長・チャプレン

上智大学グリーンケア研究所客員所員

ローマの信徒への手紙Ⅰ章16—17節

(1)¹⁶ Οὐ γὰρ ἐπαισχύνομαι τὸ εὐαγγέλιον, δύνάμεις γὰρ θεοῦ ἐστὶν εἰς σωτηρίαν παντὶ τῷ πιστεύοντι, τοῦδαῖω τε πρῶτον καὶ Ἑλλήνι. ¹⁷ δικαιοσύνη γὰρ θεοῦ ἐν αὐτῷ ἀποκαλύπτεται ἐκ πίστεως εἰς πίστιν, καθὼς γέγραπται· ὁ δὲ δικαίος ἐκ πίστεως ζήσεται.

(2) (小川修訳)¹⁶ わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者には、救いに至る神の力であるから。¹⁷ すなわち、福音にあって、神の義は、くまことよりくまことへと、顕れる。「(ひと)義人(とされて)生くるはくまことによれり」とある如し。

(3) (口語訳)¹⁶ わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。¹⁷ 神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、「信仰による義人は生きる」と書いてあるとおりである。

(4) (新共同訳)¹⁶ わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。¹⁷ 福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

本日私は深い感慨をもって初めてこの説教壇に立たせていただいています。日本福音ルーテル大阪教会牧師の大柴譲治です。牧師になってすでに32年目ですが、昨年4月より転任のため東京から大阪に移ってまいりました。

「深い感慨」というのは、私のルーテル神学校時代の恩師であった故小川修先生(1940—2011)がこの同志社大学神学部で、2007年4月より2010年1月に至るまでのほぼ3年間、ライフワークとして50年をかけて取り組んでこられたパウロ書簡について講義された場所であったからです。小川先生は、ガラテヤ書から始めてローマ書、そしてコリント前後書の講義を行ったところで虫垂ガンであることが発覚し、2009年12月に余命1年と宣告されることとなり、結局フィリピ書の講義は断念されました。そして、2011年1月5日、聖路加国際記念病院の緩和ケア病棟において小川修先生は、70歳と8カ月のこの地上でのご生涯を親しい者たち数人が見守る中で静かに閉じられたのです。そして3月11日に

多磨墓地で私たちが先生の納骨式を行っている最中に、奇しくもあの東日本大震災が起こったのでした。その意味でも先生の存在は私たちの魂の中に深く刻まれています。「草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ」（イザヤ書40章8節）。

小川修先生は1940年5月23日に東京にお生まれになりました。東京大学法学部の時代に日本福音ルーテル本郷教会で岡田曠吉牧師から受洗。大学卒業後に都市銀行に就職するも退職。立教大学神学部の大学院に進み、続いてニューヨーク・ユニオン神学校に学びます。そこで最優秀賞（Summa Cum Laude）を得て、西ドイツのエアランゲン、テュービンゲン、ミュンヘンの各大学で学んだ後に帰国。1975年よりは日本ルーテル神学大学（現ルーテル学院大学）非常勤講師（1975—1986、2005—2007）をされ、ドイツ人の小児科医であったアーニー・ブルクハルト姉と1983年にご結婚。実践女子大学文学部助教授、西独ブレーメン国際日本学園の副校長（1988—1990）などを経て、再帰国後は、東大時代の恩師の哲学者・井上忠教授の招きを受けて聖徳大学人文学部教授（1996—2010）に就任されました。病いのため最愛の伴侶アーニー夫人を失うという辛い経験を経て、2007年より石川立先生に招かれてこの同志社大学で教鞭を取るようになったのです。

私は、「不肖の弟子」の一人として、他の三人の牧師たち（立山忠浩、高井保雄、箱田清美）と共に、小川先生が残された講義録音をテープ起こしするかたちで、それを『小川修パウロ書簡講義録』として2011年より出版してきました。ほぼ1年に1冊のペースで、これまでに7冊を出版しました（リトン社）。先日第6巻として『コリント後書講義』を出すことができましたので、『ローマ書講義』（全3巻）と『コリント書講義』（全3巻）、そして『前期論文集』（第9巻）が入手できます。あとは『ガラテヤ書講義』（第7—8巻）と『後期論文集』（第10巻）の3冊を残すだけとなっています。予定では3年で完結となりますね。今回出たこの『コリント後書講義』は、その途上で小川先生が盲腸の陰に隠れていたステージ4の虫垂ガンが発見されて、余命告知がなされた時にしておられた講義でもありますので、文字どおりこれが小川先生の「遺言」となりました。この大学の神学部の図書室にも寄贈させていただいていますので、関心のある方はぜひ手に取ってお読みいただければと思います。コソコソと黒板を叩く音や、咳払いなど、深い思索と長年の研究とに裏打ちされた、臨場感あふれる小川先生の精緻な講義の様子が手に取るようにうかがえるかと思います。そのような経緯があるため、本日この場所に立たせていただけることに私は「深い感慨」を覚え、その背後に天の配剤を感じている次第です。このような日が「7年後」に到来するなどとは全く想像しておりませんでした（改めて「アドヴェント」とは「到来」という意味であることにも不思議なシンクロニシティを感じます）。

「神の〈まこと〉から人間の〈まこと〉へ」

本日の説教題として「神の〈まこと〉から人間の〈まこと〉へ」というタイトルを付けさせていただきました。それはこの『小川修パウロ書簡講義録』の副題にもなっている小川先生の言葉です。新約聖書の中では通常は「信仰」と訳される「ピスティス」というギリシア語があります（「信仰」にしても「礼拝」にしても人間の側の行為に焦点が当たっている言葉ですね）。「ピスティス」はパウロを読み解く時の重要なキーワードの一つです。「真実」とか「信実」と訳す人もいますが、それを小川先生は「〈まこと〉」と訳されているのです。ギリシア語原文で読むとローマ書1章17節には、「ἐκ πίστεως εἰς πίστιν」（エ

ク・ピステウオース、エイス・ピスティン）」という表現が出てきます。直訳すると「ピスティスからピスティスへ」となりますが、『新共同訳聖書』（1987年）では残念なことに意識されて、「（福音には、神の義が啓示されていますが、それは、）初めから終わりまで信仰を通して（実現される）」となっています。『口語訳聖書』（1955年）ではより正確に「信仰」という語が2度使われ、「（神の義は、その福音の中に啓示され、）信仰に始まり信仰に至らせる」と訳されていました。次の『聖書協会共同訳』（2018年）ではどうなるでしょうか。パウロ書簡を徹底的に読み抜くことをとおして小川先生は、この部分の「初めのピスティス」と「後のピスティス」が二つの異なったもの、即ち「神のピスティス」と「人間のピスティス」をそれぞれ指しているという洞察に至り、パウロはここで「神の〈まこと〉から人間の〈まこと〉へ」と読者に告げていると理解されたのでした。「神のピスティス／〈まこと〉」がまず最初に人間に働きかけ、それに応答するかたちで私たちの中に「人間のピスティス／〈まこと〉／信仰」が生起するというのです。小川先生は、その恩師である滝沢克己先生を引用しつつ、「啓示」とは神が私たちの家に来て戸を叩くようなものであり、そのノックの音に気づいて戸を開けることが私たち人間の側の「信仰」であると読み解いているのです。そこでは「神の〈まこと〉」は「第一のピスティス」、「人間の応答としての〈まこと〉／信仰」は「第二のピスティス」とも呼ばれます。滝沢克己先生は「第一義のインマヌエル」と「第二義のインマヌエル」を区別して語りましたが、それと同様に、小川先生の語る「第一のピスティス」と「第二のピスティス」は「不可分・不可同・不可逆」ということになりましょうか。神がまずイニシアティブをもって私たちの名前を呼んでくださる。そしてそれに応答して私たちは「はい」と神に呼び返してゆくのです。「ἐκ πίστεως εἰς πίστιν」（エク・ピステウオース、エイス・ピスティン）「ピスティスからピスティスへ」とはそのような「神の〈まこと〉から人間の〈まこと〉へ」という人格的な応答関係に即したものであるというのです。

小川先生はその講義録の中で「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」というガラテヤ書2章20節の言葉を繰り返し引用しておられます。私たちの内にキリストがおり、キリストの内に私たちがいる。小川先生は人とキリストが一体となっているという意味で「ἐν Χρὶστῷ」（エン・クリストー／in Christ）」という語を「人基一体（にんきいったい）」という語で表現します。「人基一体」とは「Jesus in Christであり、Christ in Jesusという神の定めた現実である」と語るのです。「I in Christ and Christ in me」ということですね。私たちはその事実気づいて、「人基一体」の今ここでの自己を生きる。この根源的な事実は、私たちの人生がどれほど山あり谷ありであったとしても、決して揺らぐことのない事実なのです。それは死によっても決して断ち切られることのない神の現実。そのような「神のピスティス」に今ここで与って生きることが「復活」なのです。「復活とは死後のことではない」と小川先生は繰り返し語られました。小川先生はその遺言となった最終講義でローマ書14章7―9節を次のように私訳しています。「なぜなら、わたしたちのうち、だれひとり自分によって生きる者はなく、だれひとり自分によって死ぬ者はない。わたしたちは、生きるのも主によって生き（生かされ）、死ぬのも主によって死ぬ（死なされる）。だから、生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のものなのである。なぜなら、キリストは、死者と生者との主となるために、死んで生き返られたからである」（ ）は奨励者）。

今ここで、神のピスティスからの呼びかけに自らのピスティスをもって応答しつつ、このような「人基一体（エン・クリストー）」のこの「私」を生きること。そこには明るい光に照らされた世界が開かれている。『小

川修パウロ書簡講義録』を読むと、私はそのような明るい世界を感じます。

イエスは十字架の死に至るまで、「神のピステイス／くまこと」に徹底的に信頼し、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫びつつも、そこでは神とイエスの間の信頼関係は微塵も揺らぐことはなかったという小川先生の声は、今も私の耳に残っており、心の中に響き続けています。「もしかしたら私の理解は間違っているかもしれませんよ。皆さんは自分自身で聖書を読んで、私を乗り越えてゆき、どうか自らの聖書に対する理解を深めていってください」と繰り返し告げられた小川先生の言葉を深く噛みしめつつ、今日はこのことをぜひ皆さんとお分かちしたいと思いました。今日お話ししたことは、小川先生との出会いをととして私の中に与えられた「一つの解釈」にしかすぎません。思わぬ誤解やまだ理解できていないことが多くあるのではないかと思います。しかし、マルティン・ブーバーが語るように、「真実な生は、『我と汝』の出会いであり、個々の『我と汝』の出会いの延長線上には『永遠の汝』（＝神）が垣間見える」とすれば、私たちは人生における個々の出会いを大切にしながら、「神のくまこと」によって呼びかけられていることに気づき、その神の呼びかけに対して「私たち自身のくまこと」をもって神に応答してゆきたいと思います。「エク・ピステウオース、エイス・ピスティン」なのですから。

最後に小川先生の私訳によるローマ書1章16―17節をお読みして終わりたいと思います。

「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者には、救いに至る神の力であるから。すなわち、福音にあって、神の義は、くまことよりくまことへと、顕れる。『（ひと）義人（とされて）生くるはくまことによれり』とある如し」。

当日配布の文書：（1）小川修先生略歴、（2）小川修先生論文一覧、（3）石川立先生による『小川修パウロ書簡講義録Ⅰ ローマ書講義Ⅰ』書評（『本のひろば』2011年11月号）

2017年12月6日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録

<HP では傍線等を省略しております。詳細は冊子体の『チャペル・アワー奨励集 301号』をご覧ください。>